

ニュージーランドにおける発達障害児支援[†]

清水 浩*

宇都宮大学教育学部附属特別支援学校*

本研究は、ニュージーランド・クライストチャーチ市の発達障害児支援の現状を視察し、日本における特別支援教育の推進を図ることを目的とした。具体的には、4か所の学校及び施設、①ミドルトン・グレンジ・スクール（小中高一貫教育校及び附属ラーニングセンター）、②ホールズウェル・レジデンシャル・カレッジ（問題行動児の更生施設）、③シーブルック・アセスメント・センター（特定学習障害児施設）、④セント・アンドルー・カレッジ（私立中高一貫校のラーニングセンター及び日本語クラス）の取り組みの見学及び担当者との話し合いの内容等から現状と課題を明らかにした。

キーワード： ニュージーランド、発達障害児支援、ディスレキシア、アセスメント、専門性

I. はじめに

小中学校及び高等学校における特別支援教育に関する研修を深めることを目的として、先進的な取り組みを実践しているニュージーランドに渡航し、現地の学校及び専門的な教育施設を訪問して教育事情を視察・研修し、今後の日本における特別支援教育の推進に役立てたいと考えた。

杉山は、「ニュージーランドは、人口動態が少ない場所として知られており、それを利用して大規模な前方向視的悉皆調査が行われてきた。これは、ある地域に住む全ての子どもを長年にわたりどうなっていくのか調べるといふ、根気のいる、しかし価値の高い研究である。その結果、6歳時点でADHDと診断された子どもたちの実に5～6割が、13歳の時点で非行を生じていた。これ以外にも、さまざまな長期にわたる追跡調査が報告され、さらに非行の一部が犯罪へ至例もあることが示された。多動児の権威であるカントウェルは、青年期までに改善する者が3割、青年期以後も症状が続き困難を抱える者が4割、ADHDの症状に加えて更に別の問題を抱える者が残りの3割とまとめている。」としている。

今回は、4か所の学校及び施設等を訪問し、施設設備及び取り組みを見学し、併せて担当者との話し合い等の内容から現状と課題を明らかにしたいと考えた。

II. 研修先

ニュージーランド・クライストチャーチ市

[†] Hiroshi SHIMIZU*: Developmental disorder child support in New Zealand

* Special Support School attached to Faculty of Education Utsunomiya University

- 1 ミドルトン・グレンジ・スクール（小中高一貫教育校及び附属ラーニングセンター）
- 2 ホールズウェル・レジデンシャル・カレッジ（問題行動児の更生施設）
- 3 シーブルック・アセスメント・センター（特定学習障害児施設）
- 4 セント・アンドルー・カレッジ（私立中高一貫校のラーニングセンター及び日本語クラス）

III. 研修日程

- 平成22年8月14日（土）～8月22日（日）9日間
- 8月14日（土）：東京（成田）発。
 - 8月15日（日）：クライストチャーチ着。
 - 8月16日（月）：ミドルトン・グレンジ・スクール（中高一貫校）のラーニングセンター見学。
（午前9時半～12時半まで主に小学部見学。昼食後、午後1時半～小学校長と懇談。その後、午後3時半まで中高部を見学し、放課後、中高部のスタッフと懇談。）
 - 8月17日（火）：ホールズウェル・レジデンシャル・カレッジ（問題行動児の更生施設）見学。
（午前9時～10時半まで施設見学。10時半以降 質疑応答。）
 - シーブルック・アセスメント・センター（特定学習障害児施設）見学。
（午後1時～2時半まで授業を見学。放課後にスタッフと懇談。）
 - 8月18日（水）：フリー。
 - 8月19日（木）：セント・アンドルー・カレッジ（私立中高一貫校）のラーニングセンター及び日本語クラス見学。
（午前9時～午後4時頃まで）午前は主に小学部、午

後は中学部高等部及び日本語クラスを見学。

□8月20日（金）：フリー。

□8月21日（土）：クライストチャーチ発。

□8月22日（日）：東京（成田）着。

IV. 研修内容

1 ミドルトン・グレンジ・スクール（小中高一貫教育校及び附属ラーニングセンター）

■ 概要

ミドルトン・グレンジ・スクールは45年前に創立され、25ヘクタールある歴史的な敷地には立派な樹木や庭園がある。アクセスは市中心部から15分、カンタベリー大学から5分と近い。

このスクールは「4校が1つになった学校」であり、初等科（1年生～6年生，5歳～10歳），中等科（7年生～10年生，11歳～14歳），高等科（11年生～13年生，15歳～18歳），そしてインターナショナル・カレッジ（1年生～13年生，5歳～19歳）がある。また、教派を問わないキリスト教学校で、ニュージーランド政府の学校教育制度に属しており、学問、文化、そしてスポーツ分野で秀でることを目指すと同時に、他人に対する奉仕の精神と思いやりを育んでいる。さらに、18か国からの生徒が作る国際的なコミュニティがある。ここでは優秀な成績を収めることが期待され、多様性が尊ばれ、保護者との結束が重んじられている。

インターナショナル・カレッジの生徒は初等科、中等科、高等科に所属するニュージーランド人生徒と一緒に教科を学ぶ。また、留学生の学習をサポートするため、経験豊かな有資格教師による質の高い、IELTS（ニュージーランドで、大学及び職業訓練学校への入学を目指す、また、そこで医者や看護婦として働きたいとか、それらの国に移住したいといった場合に必要となるもので、『聞く』『読む』『書く』『話す』の4つの能力を総合的に判定する資格試験）対策を含む英語指導を行っている。このことにより、生徒たちは国家試験において全国平均を常に大きく上回る結果を出している。これに関しては、ビジネス、科学、芸術の分野で秀でている学校なので、留学生を対象とした特別コースも実施しており、留学生は多くを得ることができることが影響していると考えられる。その他に、スポーツ、芸術、コミュニティーサービスなど、バラエティー豊かな課外活動への参加も奨励されている。

ラーニングセンターでは、通常学級に在籍する「読み書き障害」の児童生徒を中心に通級という形で指導を行っている。

このスクールはクリスチャンの学校であり、バイブルスタディが週2～3回設定されている。これは、入学のための条件になっており、子どもの教会での活動や親の信仰状況等が条件項目として挙げられている。なお、インターナショナルの部門は、条件はなく、国際交流の学生たちがお互いを結びつける役目を果たしている。学費に関しては、私立校ではあるが、政府からの援助があり、他の私立に比べると安く、月100ドル（7千円程度）となっている。

現在、ニュージーランド政府が学校における特別支援の調査をし、学校において機能させていくために努力しているところであるので、他の学校よりも力を入れて特別支援のサービスを提供しているということである。

■ 生徒数

全生徒数は1200名で、1クラス24～25名在籍している。その中の140名の生徒が学習障害であり、実態によって学習形態が変わる。具体的には、通級で対応する生徒もいれば、サポートしてくれる先生がいて、通常のクラスにいられる生徒もいるということである。

■ 教員数

教員数は120名で、全員がクリスチャンである。

■ 小学部ラーニングセンターの見学

授業開始時間は8:40である。始めに4人の生徒が個別学習に取り組んでいる様子を見学した。7年生12歳女子（ダウン症）は、写真を見て物語を作る学習を行っていた。外出する際に、その場所や場面によって、どんな服を着ていくのか（例えば、ショッピングモールに買い物に行く、デート、海等）について考え、その考えを「MYブック」にまとめていくことを行っていた。また、12歳の生徒は、自己紹介カード（自分の足・大きさ・目の色・髪の色等）を作成する学習を行っていた。15歳の生徒は、「鶏と子ども達の物語」を題材にアルファベットの音読みを学習しており、前に読んだことを自分の言葉で書いていくことを行っていた。児童が使用しているノートは罫線がないものであった。これは個性を大切に、型にはめないという考え方であるということであった。また、机には傾斜がついており、机上が見やすく集中しやすい感じであった。教師は、一緒に教科書を読み、感想を共有したりしていた。このように4人の生徒がそれぞれのスペシャルプログラム（それぞれの子が好きなプログラム）で学習していた。

5・6歳児のクラスでは、ゲームを通して人の気持ちに関する学習を行っていた。教師が、「Q悲しい

時の気持ちは？」、「Q公園に一人でいる子がいたら、何と声をかけますか？」などと質問し、子どもたちは他の子の様子をよく見たり、発表をよく聞いたりしていた。また、教師は「ルッキン」と言って、他の子の様子に注目させる支援を行っていた。さらに、沢山支援が必要な生徒は、インクルージョンをすることによって自己肯定感を高める支援も行っていた。

■ シニアクラスの見学

ディスレキシアの生徒が多いが、特に、自分の得意なところを伸ばす支援に力を入れていた。書くことが苦手であるが将来エンジニアになることを目指している学生は、PCを使って大学に行き、専門的に学びたいという希望を持っており、PCの技術習得や専門性を高める学習に取り組んでいた。

このクラスでは、すべての生徒に対してIEPを作成し、両親も含め、臨床心理士、教科担任等、その子に関わる全員でチェックすることになっている。このIEPは6か月毎の契約であり6か月毎に作り直すことになっている。IEPに基づいて学習を進めていくわけであるが、どのようにしたら、どのように変化し、次にどのようにしていくか考えるといったPDCAを大切にしている。またこれは、各生徒が自分自身をマネジメントしていく上でも貴重な情報となっている。さらに、保護者との綿密な連携にもかなり力を入れているということであった。

■ インターナショナル・カレッジの見学

132か国から来ており、その中でも東南アジアの生徒が多く、学校経営の面から重要なマーケットとして位置付けられている。日本人は11人が在籍しており、その中には、日本の社会や制度に適応できないで来る子もいる。

■ 担当者への質問

Q1 ラーニングセンターのシステムに関する事項

学習障害が発見されてから、政府の教育委員会に登録し、それが認可されると、特別支援教育が始まるという流れになっている。なお、7年生は読み書きができないと発見された時に登録となる。教員以外の専門家としては、言語療法士、作業療法士、理学療法士が入っており、7～14時間の取り出しをして、サポートしている状況である。このサポートを続けていく中で、2年毎にどのくらい能力が伸びたかをチェックし、その結果を基にしてプログラムの見直しと修正を行っている。サポートの割合としては1%から1.5%の子へのサポートに止まっているという現状である。また、他の生徒より能力が上の子へのサポートも2.5時間程度行っている。

Q2 問題行動児への支援

政府からの短期間の支援への援助を受け、教材などに費用を使っている。主に通常学級に馴染めない子に対してIEPを作成し、それに基づいて個別指導を行っている。このIEPは保護者、政府機関、教員が内容を共有し、半年ごとにチェックするシステムになっている。

スタッフ会議は、T、ST、支援教員、ラーニングセンター教員等で構成され、通常学級でその子を支援している教員、臨床心理士、ソーシャルワーカー、医師等はメンバーには含まれない。

アセスメントに関しては、特に、ADHDの診断は、サイコロジスト（教育心理士「エデュケーションサイコロジスト」/学校の臨床を行う人で、厚生労働省認可の資格である。保健師はヘルスサイコロジスト）が行うことになっている。サイコロジストが地域の教育委員会と連携してアセスメントを行い、6週間毎にミーティングを開催している。また、保健師は、医療的な視点で関わり、精神科、心療内科につなげるという役割も担っている。なお、教育委員会を中心とした専門家のチームは1学期に3回程度学校を訪問し指導していくということであった。

クライストチャーチ市の中に教育センターがあるので、学校にこの生徒を見て欲しいという子がいたら教育センターにつなげるという流れをとっている。

Q3 アセスメントの進め方

ダウン症は早いうちからアセスメントが可能であるが、2～3歳で分かった子も、分かった時点でアセスメントが始まるなど、学習面でおかしいなということが分かった時からアセスメントを始めている。なお、この時には複数の教員で実態を確認することを必ず行っている。基本的には、6歳児を対象としたニュージーランド共通のテスト（スタンダードテスト）を実施し、未就学児で発見することに努めている。このテストで全体的な実態を把握し、細かい点に関しては、小テストを繰り返して、状態を確認している。IQを測定するテストについては、WISC-IVを使用しているが、基本的に中学生になるまではあまりやらないことが多い。なお、検査者はサイコロジストが担当する。また、IQの高い子に関しては、中1くらいまで自分で学習の困難な点を隠してしまうことがケースとして時々見られるが、学習が進む中で分からないことが出てきて初めて支援を求めてくることが多くある。

アセスメントを開始するに当たり、教員が家に電話で学習の状況等について説明をすると、保護者の方がすでに気がついていることも多い。

アセスメントにかかる費用であるが、政府から援助をもらえる家庭ではアセスメントを実施し支援を受けることが多い。例えば、公立小においては、予算がなく、小学校の児童で読み書きのテストをしたが、障害の実態が政府からの援助が得られない程度の場合、教員が資金を出し、家庭に説明し、理解を求め、援助をもらうなどして対応しているのが現状である。

支援を担当する教員は、大学を出て、ティーチャーズカレッジに行き、学習障害に関するトレーニングを受け、単位を修得してきていたり、自閉症の子の支援員は、自閉症の勉強をしてきていたりするなど、専門性を持った人がほとんどである。

小学校は4人の支援員、中学校は8人の支援員、高校は13人の支援員がおり、週10～30時間の勤務となっている。勤務に関しては、午前中に計算、読み書き等サポートが必要な学習があるので、支援の教員が来る。なお、学校の予算で採用しているのが現状である。

支援員に関しては、対象となる子が小学部にいて、その子が中学部にいったら、その支援員も中学部についていくという対応が取られていた。

Q4 IEPの小から中へのつなぎ方

小6の最後の時期に、中の教員が来て、一緒に共通理解することを行っている。具体的には、小へ中の教員がミーティングに参加する方法を取っている。

Q5 IEPは21歳まで続いていく

21歳まで学校が卒業後支援を実施しており、21歳以降は生活支援員が担当するということがあった。

どんな仕事に就くかその障害にもよるが、スーパーマーケットに就職しても、フルタイムの仕事をなかなか持てない状況の中で、週2日働き、後は働かないなどのパートタイム雇用での就労が多いということであった。

就労にあたっては、バスなどの公共交通機関の利用やお金の使い方など、ライフスキルを中心とし、自立した生活が送れる力を身に付けることが大切であると考えている。また、障害を持った方が働きやすいように、障害のない人が障害のある人をどのように理解し、受け止めるかという障害者理解が進んだ社会を作っていくことも併せて必要である。これは、ハンディキャップを持っている、持っていないに関係なく、特別な支援が必要な子に対してというわけでもなく誰にでも必要である。ここにも、クリスチャンの学校ということで、愛を持って分かち合っていくというポリシーが貫かれている。

2 ホールズウェル・レジデンシャル・カレッジ（問題行動児の更生施設）

ニュージーランド全県から問題行動のある児童生徒が集められて更生を目的に指導を受けている。学習等について障害があるということよりも、非行などの問題行動が主な入所理由となる。更生プログラムに添い指導を行っていた。なお、女子だけの施設はネルソン地区（南島の逆の方）にある。ここでは特に友達とうまくいかなかったり、問題行動等があったりするなどのトラブルメーカーの子が集められている。その他に情緒障害の子も生活している。この施設で目標としていることは、第一に社会性を身に付けることであるが、その目標を達成させるために、誰かがサポートしてくれるという安心感を与えることを基本としている。具体的には、ピアサポートなどを取り入れたり、その子に応じてのカリキュラムを取り入れたりしながら自信をつけさせ、さらにカウンセリング的な関わりを有効に活用して、自分自身で問題行動を管理していくことの大切さを学習させている。

■ プログラム

□動物（農場体験）の飼育・作物の栽培

動物との関わりを通して生活スキルを学んでいる。また、併せて動物セラピーを行うなど、動物からの癒しを受けることも大切にしている。

□言語・文化の修得

作業（パッチワーク）で協力することを中心に、マオリ族の文化（踊り歌）を通してハッカーの練習等を行っている。

□体育

いろいろなスポーツの種類を体験する中で、体力、チームワーク、頑張る力等、を学んでいる。また、スケートボード、サーフィン等にも取り組み、集団生活を通して協調性、社会性、感情のコントロール等を学んでいる。この学びの中で協調性などの良い面を引き出すこともできている。

また、スタッフの適性もあるので、それぞれがお互いを補いながら進めている。その中でも特に、自分に自信がもてるようにすることを大切にしている。

管理の面については、夜、部屋から子どもが出てきた時の対応についても徹底しており、ホスピタリイのようである。このように、社会へ更正させるためのカリキュラムがしっかりしている。

学校に来ている時はよいが、家ではだめになってしまうということがないように、今後生きる2年間のカリキュラムを組んでいる。これに関しては苦労も多いが報いも大きいので、自信をもってやってい

る。

□ローファンクションクラスの見学

在籍は8人で、庭いじり、洗濯、ワークショップ等をしている様子を見学した。担当教師に対するASDの子からの質問が多く見られた。このクラスの生徒は全てIEPに基づいて、個々の能力及び実態に応じて学習をしている。現在2名の教員で担当し、クラスの人数は10名までとなっている。特徴としてはピアサポートルームが設置されていることが挙げられる。

□情緒障害クラスの見学

在籍6名の生徒を教員2名で担当している。見学の時は蝶の本を読んでテスト問題に答えるという学習を行っていた。この教室は生物を管理している所で、亀、金魚、犬、はちけ、鳥などがいる。また、この生物を育てることを通しての動物セラピーも実施している。各自の机の上に個人の時間割がついている。

IEPプログラムに関しては、IEPミーティングを週3回行い、グラフで目標を達成したところまでを記録している。また、個別指導の時間は、9:30~10:30となっており、1回続けて合格すれば次のステージに進めるようになっている。さらに、目標に到達したら次に行き、半年毎に更新していく。

□宿舎の見学

寝たり生活したりする場所であるので、家庭のような雰囲気を大切にしている。現在14名入所しており、中でもASDの子が多く、特に自閉の子に対する支援が必要になる。学校全体では60人いるが、デイケアの子もいる。入舎に関しては特に規定はないが、通常の学級でうまくいかなかったり、家庭的に問題があったりする子が多く見られる。

■ 担当者への質問

Q 1 何年前から始まったか？

1984年～

Q 2 定員は？

90人が最大で、ニュージーランド全体から集まっており、現在は75名が利用している。

Q 3 問題行動の割合

社会的な問題や情緒に問題がある子が多く、この2年間のプログラムで更正して戻っている。

Q 4 ここに入るアセスメントは？

地域の学校で適合していない、遅れているという評価を受けて、地域でのスペシャリストが作成する書類が送られてくる。

Q 5 他の学校の近くにあつて、そこを経てここにくるのか？

他の地区にこのような施設はなく、地域や小さな

エリアでうまくいかないでここに来る場合が多い。

IQが70以下の子がほとんどであるが、ここに来る子は犯罪歴があるわけではなく、知的の遅れや行動の問題で来ることがほとんどである。

Q 6 対象者の実態は？

日本の家庭裁判所のようなところから送られて来るタイプの子は、アスペルガー症候群やADHDの子が多く、その子たちに対しては個々のプログラムを組んでいる。

Q 7 職員構成は？

音楽療法士、作業療法士、言語療法士、理学療法士、サイコロジスト及び各教科担当で構成されている。また、読みに関する内容についてなど、それぞれの教科担当も障害のことについて十分学んでいる。さらに、これらの職員の全ては、マリオ族の文化を学び、受け継いでいくことを大切にしている。

Q 8 マオリ族の文化について教育していくことは、特別に何かあるのか？

マオリ族はニュージーランドの先住民の人たちである。150年前にイギリス人が植民地化したが、それで失ったものがある。マオリ族の大切なものを受け継いでいくために、専門の人をスタッフとして入れプログラムの一つに位置付けている。

Q 9 問題があるマオリ族の生徒に、マオリ族の大切さを教えている理由は？

マオリ族は素晴らしいということを教え、君たちは素晴らしいということ自信を持たせている。

イギリスの言語・文化が入り、マオリ族は生きづらくなった。このような背景から文化を引き継いでいくことに力を入れている。生活の中にマオリ族の文化が生きているので大切にしていきたい。

Q 10 卒業後は？

6か月後までは訪問してサポートしていく。その後は地域から、1年後、2年後にこうなっているという報告を受けることになっている。また、機能していない家庭に戻すので、家族への支援も重要になる。

Q 11 機能不全の家庭とは？

障害を持つ子を受け入れない、虐待気味の家庭が多く見られる。

Q 12 家庭への指導の具体的内容は？

難しさはあるが、信用とパートナーシップをどう築いていくかを大切にしている。具体的には、家族に来てもらったり、子どもがいる2年間に家庭への訪問を行い、話をしたりすることもある。このような取り組みを何回か行うことにより、よりよい改善を求めていく。

Q 13 校長として先生方をお願いしていることは？

生徒とのコミュニケーションを最も大切にし、最大2年で地域に戻り生活していくことを最大の目標として精一杯やっている。また、子どもたちが自信を取り戻し、自尊心を回復することを大切にしている。ここには手だてがなくなったときに来るが、ここに来て地域でうまくやれるように教育している。

ここに来るのは最終判断になってしまうが、地域でやっていけるように最大限力を出していきたい。

寄宿舎では自立支援も行っている。特に、マオリの子は、マオリ族の風習を寮で学んで貰う。

3 シーブルック・アセスメント・センター（特定学習障害児施設）

クライストチャーチ市にある民間の教育センターである。ここは特定学習障害児施設ということで、学習障害に対する専門の指導を行っている。学習障害に対する専門性は高く、多くの専門家（臨床心理士、理学療法士、音楽療法士、サイコロジスト等）がそれぞれ綿密な実態把握のためのアセスメントを行い、それをもとにIEPが立てられている。特に、アセスメントの実施方法等が勉強になった。

学校はこのセンターの一部であり、センターは一人一人へのいろいろなプログラムを持っている。その中には、一人の先生が一人に付く3週間のコースがある。具体的には、毎朝3週間通ってきて、最後にアセスメントがあり、どのくらいできるようになったかを確認するプログラムとなっている。これに関しては、LDのテストをするためにも一人に一人付くように調整している。このように、OT、ST、アセスメントをする教員、教育プログラムを作成する専門の教員がいる。

学校には2つのクラスがあり、最大12名の生徒が在籍することができる。また、午後は、担任とTがついて指導する。一週間に一度、OT、STと関わる時間がある。

■ SST指導の実際

SSTを活用したプログラムを実施している。これは、心理士が作成し、症状によって2年～5年間指導に当たり、通常学級へ戻るようにしている。このプログラムは、何ができるようになったかを評価できるようにしていることが特徴である。

また、LDの子に対しては、自分の障害を乗り越えていけるようプログラムを組んでいる。

□①SONG

- ・肯定的に自信がもてる歌詞

□②WHAT ARE SOCIAL SKILL?

- ・今までの振り返り

□③GAME

- ・カエルの音の時は、静かに指示を聞く。
- ・シャレードゲーム（ジェスチャーゲーム）
例）皿洗い、かくれんぼ、郵便屋さん等、二人で協力して話し合って、どうやるか決めて演技する。この話し合う場面を、関わり手として大切なポイントと考えている。

□④DOCUMENTARY GROUPS

- ・AB二つのグループに分かれる。
- ・いじめがあったときどうするか意見を出す。
- ・けんかしたときどうしたらよいかの話し合い。

□⑤RELAXATION/DISCUSS IN

- ・今日の振り返りでは、いつもより友達が集中して話を聞いていた、みんなハッピーだったのではないかという意見が出された。

■ 担当者への質問

Q1 ここに来るプロセスは？

読んだり書いたりすることが通常学級で遅れている子に来る。IQのテストも実施し、どうしてうまくいかないか等の分析も行う。特に、ワーキングメモリーがうまく機能しない、目に障害がある、言語障害等の症状が見られたら年度末にテストをする。

年齢は、7～12歳児までいる。一つの学級に多様な年齢の子がいる。また、読み書き障害の子がメインとなっている。

Q2 エデュケーショナルサイコロジストとサイコロジストとの違い？

国によって異なるので、線引きに関しては不明であるが、トレーニングすればどちらも判断できる。ADHD児は医師が、また、LDや軽度発達障害はサイコロジストがそれぞれ診断する。政府が認めただのが、2年前位なので必要性が出てきた。

Q3 アセスメントに来て、メインストーリーでやっていける子もいるか？

なるべく戻したい。個人で助けてくれる人もいる。学校と一緒に行って助けてくれる人がいる。

Q4 学校から要請もあるが、支払いは親であるので、親が相談に来る

このセンターの存在を知らない親が多く、それが課題となっている。

Q5 費用（料金）について

私立のセンターであるので、料金が発生する。公立のセンターはない。

Q6 プログラムの内容

センターは、スクール、作業療法、チュータ（個人授業）から成り立っている。この仕事は本来政府がやるべき仕事であると思っている。

Q7 プログラムについて

公立学校でのプログラムでは不十分と判断してこのセンターに来ている人もいます。

学習障害に対する支援だけではなく、生徒一人一人が自信を持つことができるようなはげましを中心としたプログラムを大切にしている。

ここで実施しているプログラムと公立で行っているプログラムとの関連については何とも言えないところであるが、結果的には一人一人が落ち込んでいるところを十分補って公立に戻るることができる。

生徒の様子を見ると、通常学級にいと頑張らない生徒が多く、自信を持たせ、達成感を得られるなどその子のペースにあった指導をしている。

Q8 公立の学校では、どのくらい支援を必要としている子がいるのか？

25%

Q9 この25%の子たちはすべてが支援を受けているのか？

担任がその障害に気づくトレーニングを受けていないことが多い。学習障害のレベルによっては通常学級の中で支援をするし、通常学級の中で一对一の支援が可能となっている。

Q10 LDの判断は誰が？

サイコロジストが2~3時間アセスメントをし、判断する。費用は3万円程度となっている。

Q11 使用する検査は？

WISC-IVを主に活用し、音韻認識、書く、空間認知、視知覚、長期記憶、ワーキングメモリー等について詳しく実態を把握する。

4 セント・アンドルー・カレッジ（私立中高一貫校のラーニングセンター及び日本語クラス）

私立中高一貫校のラーニングセンターを見学した。ここでも担当教員の専門性が高く、しっかりしたアセスメントを実施していた。

■ ラーニングサポートセンター見学

8~9名の生徒でクラスが成り立っており、読むこと、書くことの学習を中心に行っている。

標準テストを基にしてカリキュラムが編制され、習熟度により必要なサポートが選べるようになっている。例)読み書きのサポート、数学のサポート等。

クラスで下から10番までの子は特別に放課後サポートが得られる。ここはニュージーランドで一番サポートが得られる施設となっている。

サポートの特徴であるが、他の学校では問題が見過ごされていたが、ここではきちんとしたサポート、アセスメントをしていきたいと思いますというのでやっ

ている。

ここを利用する家庭は裕福な家が多い。実際アセスメントには費用がかかるが、それに対して喜んで費用を払う家庭が多い。また、アセスメントの評価を行い、どのくらいのヘルプが必要であるか随時検証している。つまりこれは、公的なヘルプが受けられるには基準となるきちんとしたアセスメントが必要であるということである。さらに、ティーチャーズエイドを雇う支援がある。書き取り、パソコンなど費用を出せばあらゆる支援が受けられる。

ここでは2つの大きな目標、理念、①キリスト教に基づいている、②愛国心、に忠実であり、真実、優秀、信仰がその下にある。

■ 担当者への質問

□6時間目の読みの時間を見学

一对一の個別授業を行っていた。この授業を担当しているリンダは、小学校の免許を持ち、小学校の教員をしていた。小学校では全部を見なければならず、その中で、特別なサポートが必要な子を見たことがきっかけで大学院に行った。大学院では、いろいろな選択コースがあったが、読み書き障害への支援のコースを選んだ。

ノーマルな発達であり能力は普通だが、必要なことができない子など、軽度発達障害児への支援を担当することが多い。特に、通常学級の中で、読み書き障害の子を支援している。

この学校にサイコロジストはいないので、この学校からサイコロジストのところへ送っている状況である。それには、まずリンダがテストをし、他の子と比べて落ちていないかを見るスクリーニングテストをする。そこで発見し、そうかなという生徒については、教育心理士の所へ送り、そこでWISC-IVをやることになっている。

その他として、読み書き障害のテストもする。具体的には、かかる時間を計ったり、聴覚記憶、視覚テスト、書き方、数学、体のバランス、微細運動、粗大運動等のテストをやってサイコロジストが判断する。費用は400~800ドルかかり、保護者が支払いをする。

そのアセスメントを受けて教員が何をすればよいか分かる。その結果、一对一での支援が必要な場合はそれをやるが、そのサービスについての支払いも保護者がやることになっている。なお、公立小学校では、障害がある子がいてもその障害を認めないし、その予算もないということが課題となっている。

最近になって、文科省が読み書き障害について認めるようになってきた。保護者が動いて、早期発見

し国が動いた。この背景には保護者の運動があって国が動いてきた。このやり方はイギリスから取り入れている。

Q1 イギリスでは20%の子がサポートを受けていると聞いたが？

イギリス、米は法律でサポートすることが決められているが、ニュージーランドでは法律化されていないので、こうしなさいということは決められてはいない。

Q2 支援が必要だという生徒に関しては、何歳から読み書き等に関してのアセスメントをするのか？

基本的には、学習する機会が与えられた時に支援が必要だとされた時からアセスメントが始まる。具体的には、5歳児で早期発見されても良く分からないので、8～9歳で発見されることが多い。また、音韻認識が不十分だと分かるのは、3歳位で発見されることが多い。さらに、発見されて適切な支援が受けられれば、読み書きのサポートが受けられるようになっている。

現在、サポートを受けている生徒数は160名である。このように160人支援が必要と登録されているので、教員2名が2週間で3時間の支援を行っている。この背景には、保護者のニーズが高く、ここでのサポートを受けたいとしてここを選ぶので数は多くなっている。

費用については、一対一の支援は保護者がその教員に料金を支払い、グループ指導の場合は学校に支払うというシステムになっている。

学力テスト時のサポートは、時間を延長したり、読んだり書いたりするなどの支援が用意され、160人だけがサポートを得られる権利がある。

具体的に実施したサポートの内容に関しては、教育心理士によって記録がなされる。

□具体的なサポートの例)

- ・時間延長して問題を解く
- ・試験前にどんな試験なのか支援員に見せ、テストに関する書く読み、リーダー、ライダー、コンピュータ等（大学でもそのサポートが受けられる。オーディオブックやIPADでの学習もある。これは、読み書き障害の子には有効である）。
- ・書いてあるものも写真でとると、それを読んでくれるソフトもある。

以上のようなサポートに関しては、実施状況を政府に報告し、認可してもらえるように要請している。

Q3 キャリア教育へのトレーニングは？

16歳までの学校なので、できる限りの支援をしていく。特に、自分の得意分野で頑張っていけるよう

に、アート、スポーツ、ミュージック等も取り入れている。

Q4 ラーニングセンターの課題

多くの生徒が支援を望んでいるが、資金や資材が足りない状況であるので、すべての教員が読み書き障害の支援ができるようになって欲しいと考えている。先生方に資料として配っているものは、スタッフ会議での内容など、通常学級でどう支援をして欲しいかのリストを活用している。

Q5 通常学級の中で支援できるのではないかな？

気がついた時からしっかり支援していこうという姿勢である。

Q6 通常学級の中でできる支援は？

年度始めにラーニングセンターから支援の必要な生徒のリストが送られてくる。ここには支援をする生徒への支援内容が書いてあるので、そのリストを見て、実際やった支援について評価していく。例えば、落ち着きがない子に対して、注意事項に「前に座らなければならない」と書いてあったら、その通りに支援していく。

Q7 この制度は約10年前にできた。その前については？

約10年前は、読んだり書いたりする支援者がいたり、コンピュータはこちらから支給するなどしてした。個々の支援であるから、必要なことはすべて書いてあり、特に、各教科のテストで必要な支援が受けられるようにリストアップされている。しかし、外国語のリストはないので、できる限りこのシステムを使って支援ができるようにしている。

V. 研修を終えて

見学は私立学校等が主であり、公立校については見学できていないので、あくまでもニュージーランドの教育の一部ではあるが、ディスレキシア（読み書き障害）児に対する教育及びアセスメントの高さについては驚かされるものがあった。

現在の日本においては、個別的教育支援計画を教員が全て行い作成しているが、今後はいろいろな専門家の力を活用し、一緒に考えるシステムになっていけるとよいと感じた。

VI. 参考文献

- 1) 子ども虐待という第四の発達障害：杉山登志郎，学研のヒューマンケアブックス
- 2) 自閉症—その概念と治療に関する再検討—：ラター，シヨプラー著，丸井 文男 監訳，黎明書房